

## 新潟県立工業学校 初代校長 荒川新一郎

東京大学名誉教授 大橋 秀雄 様

長岡工業高等学校の同窓会の方には、荒川新一郎は県立工業学校の創立校長を務めた元祖のような方です。在任は2年と短かったので、その実像はほとんど知られていないでしょう。一方荒川は、私の母校、東京大学工学部機械工学科の第一回卒業生で、まさに大先輩です。加えて、もう一つの母校、県立村松高等学校の正門は、荒川の指示によって作られた建物や設備のなかで唯一現存する遺構で、国の登録有形文化材に指定されています。

私はかつて、二重の縁で繋がった荒川の生涯を辿るため、調査に没頭したことがありました。そしてあの校門から、荒川が発したメッセージを読み取りました。「日本の紡織産業の発展を助けたイギリスとフランス」に対する感謝と敬意が校門に込められています。

以下に荒川の生涯を簡潔にご紹介します。(歴史的人物として敬称略)

まず、荒川新一郎の波瀾万丈の生涯を一覧表でご覧ください。



## 荒川新一郎の生涯

- 安政4年(1857年) 長州藩士の長男として山口で生まれる。
- 幼くして藩校明倫館と海軍塾で漢文と英数三角法を学ぶ。
- 明治4年(14才) 上京して海軍兵学寮で学ぶ。
- 明治6年(16才) 工学寮第一期生として機械科に入学。成績抜群。
- 明治12年(22才) 工部大学校卒業。日本初の工学士。成績優秀のため、紡織研究のため3年間の英国留学を命ぜられる。
- 明治16年(26才) グラスゴーで実地経験を重ねて帰国。農商務省工務局技師として紡織業界の技術・経営指導に乗り出す。紡織工場の建設、運転などの助言・指導のため全国を行脚する。厳しい指導に定評があった。
- 明治23年(33才) 農商務省を退官。以降紡織会社の顧問などを務める。
- 明治33年(43才) 第5回パリ万国博に際し、英独仏に工業視察に赴く。
- **明治36年(46才) 新潟県立工業学校初代校長。**
- 明治38年(48才) 農商務省花筵検査所(神戸)所長。
- 明治40年(50才) 病と神経衰弱を理由に退職。以降官職に就かず。
- 昭和5年(73才) 再婚の妻子とも別れ、自炊生活の末孤高の生涯を閉じる。



Arakawa

昔は写真が超貴重品でした。荒川の写真を探しましたが、見付かったのは工部大学校の卒業写真だけでした。23名の集合写真から抜き出した左の写真が、荒川を伝える唯一の映像です。サインは、彼の卒業エッセイに残されたものです。

荒川は渋沢栄一より17歳年下ですが、維新の荒波をまっとうに被って、変わりゆく時代の最先端を突っ走ったことに変わりありません。官と民の両方を経験したこと、留学経験があることも渋沢と共通です。明治24年、渋沢が社長を務めていた京都織物が経営危機に陥ったとき、紡織業界の第一人者として荒川に救援を求めました。荒川は専務として合理化に専念し、2年で業績を飛躍的に改善しました。渋沢はお礼にと、慰労株の贈与と社長就任を依頼しましたが、荒川は両方を断って去って行きました。なにか気に入らないことがあったようです。

荒川の才気は人並み外れています。彼の親族、知人には、政財界にわたる実力者が揃っていました。彼にもう少し世渡りの意欲があれば、明治史に名を残す成果を挙げたに違いありません。そんなこと気にしないのが、荒川我真骨頂なのでしょう。

荒川は、工部大学校卒業後直ちに3年間の英国留学を命ぜられました。当時紡織業の世界的中心だったグラスゴーに滞在し、近隣の工場を隈無くまわって、最新の紡織機械やその操作方法を習得して帰国しました。それから7年間、農商務省技師として全国の紡織会社をまわり、技術や経営指導を通じて紡織産業の強化に専念



しました。厳しい指導で、畏敬される存在でした。

そんな実力者が、33 歳で官を辞し民間に下りました。工部大学校卒業生は、官費で学んだ代償として 7 年間公務に就く義務があります。その 7 年が過ぎたからさっさと辞めた。農商務省の組織変更に対抗し上司と一緒に辞表を叩きつけた。2 説ありますが、後者の方が荒川っぽい感じがします。

官の時代は、当時の公務員名簿などで荒川の名を追うのは容易でした。しかし民に下ると、情報が一気に消えてしまいます。群れを嫌う荒川にも、生涯敬愛した郷里の先輩品川弥次郎子爵がいました。靖国神社脇の九段坂公園に大きな銅像が立っています。国会図書館に残された品川書簡集の中に、荒川の手紙を 8 通見付けました。先に紹介した京都織物の話は、官を辞した翌年のできごとですが、その手紙の中から渋沢との関わりを見付けました。

官から離れた荒川が、13 年のブランクのあと文部省の依頼で教育の仕事を引き受けたのは驚きです。何か断り難い事情があって、村松という辺鄙な城下町にできる工業学校の校長を引き受けたと推察します。地元産業の染織を目玉にすることもあって、荒川の専門知識がうずき出し、理想の学校を作ろうと意気込んだことでしょう。

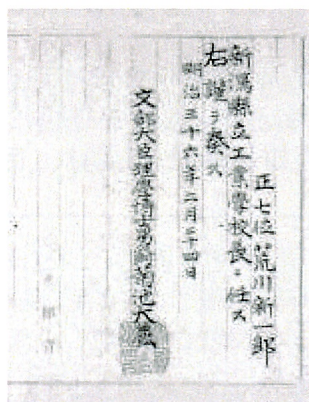
でき上がった学校は、校舎も実習工場もメリハリのある洋風建築で、英国輸入の新鋭紡織、染織機械を備えた見事なものでした。荒川が思い通りの注文を付けたに違いありません。現存するのは右の校門のみですが、二本の正柱はイギリス積み、副柱はフランス積みという特異な煉瓦造りで、職人の気紛れでできたとは思えません。荒川の意志が注ぎ込まれています。荒川は主としてイギリスの紡織から学びましたが、装飾織物が主体だった京都織物で、フランスの紡織技術を活用しました。日本の紡織業の発展を助けたイギリスとフランス、その両国に対する感謝と敬意を校門に込めようと思ったに違いありません。



県立工業学校校長は、高等官の中でも奏任官に属します。任命手続きは、先ず文部大臣が総理大臣に任用を上申します。総理大臣はそれを承けて任命し、天皇にその旨を上奏します。国立公文書館に、その 3 通の辞令が残されていますが、下に文部大臣の上申書と総理大臣の上奏書を転載します。

上奏書は、天皇御璽の朱印が押された荘厳なもので、見るだけで身が引き締まる思いがします。現在の校長先生は、県教育委員会の発令で国璽とは無縁になってしまいました。

荒川が在任中、どのように過ごしたかについては、断片的な記録しか残っていません。県庁や中央との対応などで、多忙な日々を過ごしたことでしょう。たった 2 年で二代目校長の内山久太郎（山口高等商業から転任）に交代しました。文部省から休職の辞令を受け、すぐ農商務省の発令で花筵検査所の所長に就任しています。古巣の農商務省が、新しく始める事業の責任者として、荒川に白羽の矢を立てたのでしょう。



当時アメリカに大量輸出されていた花柄の筵に粗悪品が混入し、花筵全体の評価を落としかねない状況でした。そこで、神戸に新しい検査所を設置して国が直接監督に乗り出しました。花筵はい草で編んだ織物です。荒川の専門には違いありませんが、荒川は強い違和感に悩んだようです。就任 2 年後に提出された辞職願の中に、「宿病のため近来益々神経衰弱仕り職務に堪え難し」と述べてあり、志とは遠い仕事に苛立ちの日々を送ったのでしょう。明治 40 年以來荒川は再び官に戻ることはありませんでした。

わが国初の民営洋式紡績会社、鹿島紡績所を創立した鹿島萬平の孫娘と結婚して破局、再婚の妻子とも別れて、晩年は阪神沿線今津で部屋借りして自炊生活を送りました。昭和 5 年 3 月、桜の訪れを前に 73 年の孤高な生涯を閉じ、山口市郊外にある父祖の眠る墓所に帰りました。死に臨んでいかに生涯を振り返ったか。おそらく昂然として悔いるところはなかったでしょう。